

医療通訳は実現可能か

3年2組15番 富永翠
3年3組22番 中谷とわ
3年4組24番 仁科あい
3年5組33番 村井瑠菜

Keyword: 「医療通訳」「言葉の壁」「通訳者の育成」「医療と通訳の両立」「翻訳機」

1. はじめに

コロナが流行る中、切迫した医療で発達してきたテクノロジー。スタディーツアーで、日本在住外国人が、日本の医療機関で言葉の壁が原因で様々な問題に直面していると知った。私たちは、日本の医療機関で、外国人が、道徳が尊重され、安心・安全な医療を受けられるために何が必要かを医療通訳の観点から考えたい

2. 序論

研究の目的は現在の医療通訳の現状について知り、医療通訳における問題点を解明することである。具体的には、日本での医療通訳者の雇用状況や医師と外国人患者の壁、翻訳アプリ等を使用する上での問題などを調べていく。そこから、医療通訳者の必要性について考察する。元々、私たちは医療について探究し、スタディーツアーで福井国際交流センターを訪問した際、外国人が必要としている医療通訳の存在を知った。福井国際交流センターによると近年、在日外国人が増えてきている。しかしながら、外国人を受け入れる拠点病院が少なく、医療において医師と患者との関係性は重要であるが、言葉の壁により互いに理解することが難しいという問題がある。特に言葉の壁においては翻訳アプリを使えば良いと思っている人がほとんどだが、翻訳アプリを使っての会話は正しく伝わっているかが互いにわからない。うまく会話が行われなことは患者に精神的なショックを与えてしまう。そこで必要なのが医療通訳者であるが、医療と語学力の両方の知識がいるためあまり普及していない。このような現状を知り、医療通訳について探究しようと思った。また、2012年の伊藤 美保、飯田 奈美子、南谷 かおり、中村 安秀らによる以下のような先行研究がある。

<外国人医療における医療通訳者の現状と課題—医療通訳者に対する質問紙調査より>

1. 目的

本研究は、医療通訳を実施している当事者に対して質問紙調査を行い、医療通訳業務や研修の内容、医療通訳の現場での課題などを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

通訳者を派遣しているNPO、地域の国際化協会や、通訳者を雇用している医療機関等に通訳者への配布を依頼し、郵送にて直接回収し分析した。

3. 結果

有効回答数は284名(有効回答率 33.4%)であった。5年以上の経験者が46.1%いたが、常勤の通訳者は少なく、76.4%が派遣の形態をとっていた。対応言語は、手話を含む14言語であった。通訳頻度が月4回以下のものが68.3%であったが、8.5%は月20回以上の医療通訳の機会があった。回答者の54.4%が総時間20時間以上の研修を受けていた。医療従事者と患者の間に位置する通訳者として、種々の困難さに直面している実態が明らかになった。

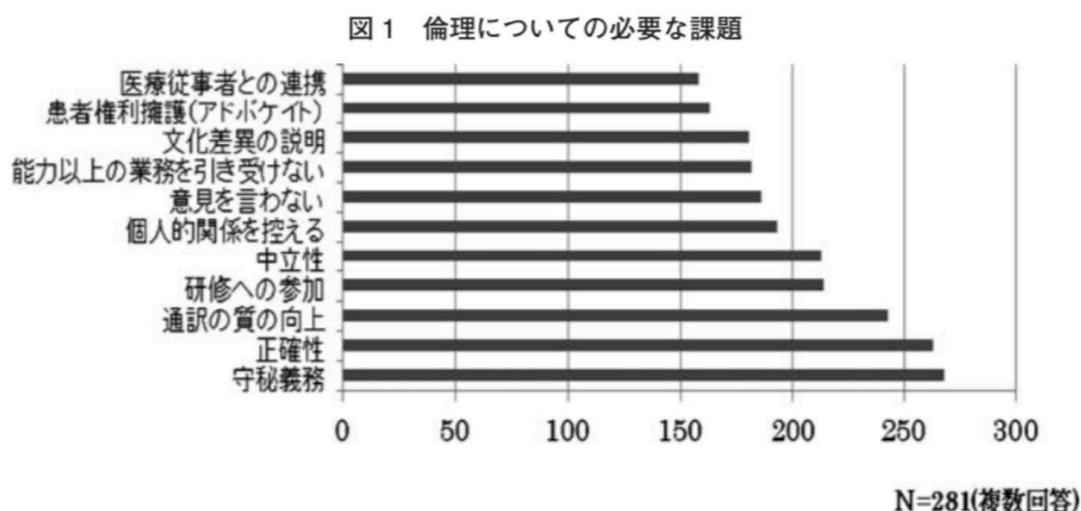
4. 考察

医療通訳者を直接対象とした本調査により、すでに多くの医療通訳者が現場で活動している実態が明らかとなった。研修を受ける機会が少なく、通訳技術の維持向上に必要な不可欠な研修体制の充実が必要であった。医療従事者側と患者側の双方に、通訳者の効果的な活用方法と公

平性という業務範囲を明確に説明し、同時に通訳者を精神的にも支える立場のコーディネーターが必要である。

このことから、医療通訳の必要性が重要視されているものの、現時点では、医療通訳者を育てる制度が不十分である。

「医療通訳の倫理について必要な課題(複数回答)」より医療通訳者として必要な倫理として、守秘義務(95.4%)、正確性(93.6%)、通訳の質の向上(86.5%)、研修への参加(76.1%)についての回答が多かった。一方、医療従事者との連携や患者権利の擁護については、それぞれ56.2%、58.0%と倫理項目としての認識が低かった(図1)。」



これらの結果より、医療通訳者は人間関係における様々な課題に直面している。よって、私たちは、医療通訳は医療や言語を学ぶだけではなく、医師と患者の相互理解のために道德面でのサポートも必要だと考えた。

調査を行うにあたって以下の事を行った。

まず、私たちは奈良県立病院の看護師2人にインタビューをした。全部で四つの質問をした。

①病院に通訳者はいますか。

②日本語を理解するのが難しい患者さんは来院されますか。来られた時の対応はどのようなものですか。

③通訳の方がおられる病院は奈良県内にありますか。

④外国語が理解できてそれを診療に活用している医師や看護師はおられますか。何人ほどおられますか。

次に、翻訳アプリの機能性を調べた。使用した翻訳アプリはGoogle翻訳、医療相談トランスレーター音声サポート付き、医療通訳のメディフォンの三つである。翻訳された文章が適切であるかをネイティブの先生に確認してもらった。

他には、インターネットで医療通訳について調べたり、留学生にインタビューをして、日本で医療機関を受診する際どうしているのかを聞いた。本論で結果と考察を論じていく。

3. 本論

序論で述べたとおり、外国人患者が日本の病院で言葉が通じず困っていることが分かった。一般社団法人日本病院協会の平成27年度の「医療の国際展開に関する現状調査結果報告書」による471人の外国人に対する調査では、95.8%の人が病院での言語・会話に不安を抱えていると分かった。また、日本の医療機関での医療通訳の提供体制が十分に整っていないと感じる人は44.6%だった。言語・会話に対する不安は、43.7%を占める治療費の不払いとも大きく関連していると考えた。理由として、国土交通省が発行している「医療費未払い対策マニュアル」に、

医療費未払いが起こる理由として、会話や言語の不十分であることが挙げられているからである。現在は様々な種類の翻訳アプリが普及しているため、私たちは翻訳アプリを使用すれば、外国人患者の言語の問題を解決できると仮説を立て調査を進めた。そこで、インターネット上にある様々な翻訳アプリを実際に使用した。その結果、例えば、「水をください」と英和翻訳すると「ガス入りの水をください」など正確に翻訳されないことがほとんどであった。また、医療者と患者が互いの言語が分からない場合、翻訳された相手の言語を見て、正しく翻訳されているかの確認が互いに不可能である。しかし、医療通訳は患者の命に関わる通訳であり、決して誤訳があってはならない。よって、機械ではなく、人を通しての通訳が必要だと考えた。そこで現在日本在住の外国人はどうしているのか。スタディーツアーで福井国際交流センターを訪れた際に聞いたことは、日本の病院で、医師が患者の言語が分からない場合、患者に診断結果を伝える時に、患者の子を連れて来させることがある。なぜなら、子供は日本の学校で過ごしているので、日本語と患者の言語の両方を話せる場合が多いためである。しかし、がんなど深刻な親の病名の告知を子にさせるのは、子どもに精神的ショックを与えるという。このことから、医療通訳を職業としている人による通訳が必要であると考えた。実際、日本の医療機関で医療通訳者は活躍しているのか。奈良県立病院に勤務する看護師2名にたずねたところ、病院に在中する医療通訳者はいなかった。日本語が分からない患者が来院した時は、翻訳アプリの使用か、数少ない英語が話せる医療者で対応していて医療通訳の体制は不十分であった。また、奈良県内の医療通訳体制について知らないという。このことから、医療通訳者が必要でありながら、医療通訳体制は不十分であると分かった。なぜか。第一に、通訳者を雇うにはコストがかかる。電話通訳という方法もあるが、病院、または患者自身に多額の費用を請求されることから現実的ではない。それでは、日本の病院で医療通訳のサービスの拡充を進めるにはどうすれば良いか。インターネットで調べた結果、医療通訳について学べる学校を見つけた。フィリピンのセブ島にあるハルカという学校は、オンラインクラスや宿泊施設などが備わっている医療通訳専門の学校で日本からも受講することが出来る。この学校では、一から医療通訳者を育成するのではなく、現在医療者である人が通訳を学び、通訳者として活躍している人が医療を学ぶのである。この学校は、会話の勉強をするだけである。しかし、医療通訳を行うためには、単に通訳できれば良いということではなく、患者が診断結果を聞いた後の精神サポートを行う際の道徳心。また、権利や法律を学ぶ必要がある。それを踏まえた上で、医療通訳もできる専門性の高い医療従事者を育成する教育機関をこれから増やしていくべきだ。外国人患者が直面する言語の問題の対策として、専門性の高い医療従事者の育成以外に、医療スタッフの交換留学も有効であると考えた。この方法のメリットは、費用がかからずに言語の問題に対応できる点である。例えば、英語が堪能なフィリピン人の外国人看護師の流入は、日本人の医療者と英語圏の外国人患者のコミュニケーションを円滑にする。このように、外国人の医療スタッフの流入は、医療通訳者が在中しておらず医療通訳体制が整っていない病院の大きな貢献につながり、医療技術の発展にもつながる。以上のように、日本の病院の医療通訳の問題は、これからも様々な解決策を講じ、状況の改善を行うべきである。

4. 結論

医療通訳問題を解決するにあたり、現時点で私たちは、医療通訳もできるなど医療従事者の専門性を高める、医療スタッフの交換留学が最善の解決策だと考えた。

外国人の日本の医療現場での通訳問題を解決するのは「翻訳アプリ」ではなく、医療通訳をする「人」である。しかし、コストの面から医療通訳者の雇用は現実的な解決法ではない。医療技術に加え、医療通訳の技術も身につけた医師や看護師など、専門性の高い医療従事者の育成が有効な解決策である。また、医療者の交換留学は言葉の問題をあまり費用がかからずに解決できる点と医療の発展において有効な方法である。外国人の日本の病院での言葉の壁の問題の解決を目指して今後も有効な解決策を模索し続けたい。

5. 参考文献・出典

一般社団法人日本病院協会「医療の国際展開に関する現状調査結果報告書」
国土交通省「医療費未払い対策マニュアル」

<https://hlca-english.com>